

## レヴィナスにおける存在論の問題と

### 他人への関係としての言葉の問題

樋口雄哉

#### はじめに

一九四七年の著作『実存から実存者へ』においてレヴィナスは、自己の存在に回帰しない「私」のあり方を追究する。この試みの背景には、ハイデガーの存在論は根源的ではないというレヴィナスの問題意識がある。そして彼は、自己の存在に回帰しない「私」が成立する次元として、時間と他人への関係の二つを見出すに至った。このとき後者の他人への関係に関しては、「私」が自らの主体性を維持し続けながら他人と関わり合うということが、どのようにして可能かという問題が現れる。一九五一年の論文「存在論は根源的か」では、ハイデガーの存在論が改めて問い直される一方で、一九四七年の著作において組上に載せられた他人への関係は、言葉として考えられることになる。そしてこの他人への関係と言葉についての思索は、一九六一年の著作『全体性と無限——外在性への試論』<sup>(1)</sup>でさらに深められることになる。では、このようなとき、レヴィナスにおいて存在論の問題と言葉の問題とのあいだにはどのような連関があるのだろうか。本論の目的は、この両者の問題のあいだの連関を明らかにすることである。

ここでは特に『実存から実存者へ』（一九四七年）から『全体性と無限』（一九六一年）へと至るまでの期間の著作に的を絞って論じる。論述は以下のように進める。第一節では主に『実存から実存者へ』の議論を辿る。この著作で彼は、実存者と実存の結び付きをイポスターズとして問題にし、自己の存在へと回帰しない「私」のあり方の可能性を問う。そしてそれが可能となる次元として示されたのが、時間と、他人への関係の二つであった。第二節では一九五一年の論文「存在論は根源的か」を取り上げる。ここでレヴィナスは、他人への関係が存在論よりも根源的であることを示そうと試み、他人への関係を、発話者が対話者に語りかけることをその本質とする、言葉の関係として提示する。第三節では、『全体性と無限』を取り上げ、件の対他関係がこの著作においてどのように捉え直され、言葉の問題がどのように深められるのかを検討する。

## 第一節

『実存から実存者へ』序章の冒頭でレヴィナスは、存在が持つ、奇妙な一般性に注目する。この一般性は、類の一般性、「何物か」一般の一般性、すなわち存在者一般の一般性とは異なる。そしてこのような一般性を備えた存在が属詞として主語に結び付けられたとき、われわれは「この属詞は主語に何も付け加えない」と言わざるを得ない(EE, 17)<sup>(2)</sup>。しかしここでレヴィナスは次のように問うている。「そうであれば、存在がある『存在者』に帰属するよ  
うな範疇を理解することの困難さそのもののうちに、存在一般の非人称的性格の痕跡をみるべきではないだろうか。存在一般は、ある転換によって、すなわちこの著作の主要な主題をなしている現在という出来事によって、ある『存在者』の存在になるのではないだろうか」(ibid.)。

ところで、この著作で「イポスターズ (hypostase、実詞化) として問題とされるのはこの「転換」に他ならない。「実存から実存者へ」は、非人称的な実存一般 (「ある (il y a) 」) において、主体としての実存者が表れ、実存と結びつくというこの出来事を、イポスターズとして概念化する。そして実存者が実存することの意味、実存者が実存することの意味を、イポスターズの意義から説明しようとするのである。以下、この著作が辿った道程を一瞥したい。

第一章でレヴィナスははじめに、実存者が実存するという出来事そのものを主題化するために「世界の消失」を取りあげ、続いて、気だるさ、怠惰、疲労といった現象の分析を通じて、この実存者の実存の内的構造を説明しようとする。そして、行為の瞬間に現れる疲労において、「実存者によって、実存することに対してもたらされる遅延」(EE, 51) が、「両者の間の「ずれ (décalage)」(EE, 42) が、乖離が見いだされることとなる。しかしこの乖離は、それによって実存者と実存が関係を結ぶことができる極小の間隔をもたらす。したがって疲労によって明らかにされたのは、実存と実存者が関係をとり結ぶ出来事、「実存のなかでのある実存者の浮上」(ibid.) の構造でもある。

第二章では、実存者が世界内に実存する様態が主題となる。「世界の消失」や疲労の次元では、実存者と実存者の実存との関係が浮き彫りとなった。これに対し世界における実存では、実存者はこの関係とは別の関係、諸事物との関係に入る。レヴィナスはこのときの主体としての実存者と事物との関係を、志向と志向の目的としての対象との、「対象が欲望とびったり一致する」(EE, 67) 関係であるとする。世界における対象とのこのような関係を規定するのは志向性であるが、ここでレヴィナスは、フッサールの志向性概念を取りあげ、志向性が意味の起源であるとされる点に注目する。対象が意味を有するということは、対象が志向の働きに準拠することに他ならない。すると、世界内に、またレヴィナスの用語法を用いて言えば「光」のうちに、対象が置かれてあるということは、対象が「誰かのために実存し、彼へ差し向けられ、既にある内面へと身を傾け、それに吸収されることなく、自らを与えている」

(BE, 75) に等しい。そして対象は、主体としてのわれわれの内面性に対し外的ではあるものの、世界内にある限り「われわれからやって来る」(ibid.) のである。

次にレヴィナスは、この著作の主要な主題である、イポスターズへと向かう。しかし「存在の純粋な出来事のみならず、出来事から実詞への転換」(BE, 125) とも呼ばれるイポスターズの意味を問うためには、先に実存者なき実存が確立されなければならない。そこで彼はこの実存を次のように導き出す。「あらゆる存在者が、すなわち諸事物と諸人物が、無に帰すのを想像しよう」(BE, 93)。このとき、「この無に帰すことをあらゆる出来事の外に位置づけるのは不可能である」(ibid.)、すなわちこの無に帰すこと自身もまた、無に帰すことができる。「しかしこの無そのものはどうか。それが夜や無の沈黙であろうと、何かが起こっている」(ibid.)。すなわち、あらゆる存在者が無に帰され、またあらゆる出来事が無に帰されるのを想像しても、無に帰されえないものが残される。「これもあれもない。『何か』はない。だがこの全体的な不在が、今度は不可避の絶対的現前なのである」(BE, 94)。そしてレヴィナスはあらゆるものを否定した後も否定され得ないものとして現前しているこれを、「ある (il y a)」として概念化し、純粋な存在することであるとする。さらに彼はこの「ある」に、非人称性、非人格性といった性質を認め、「ある」は恐怖であるともする。

イポスターズとは、この「ある」において、実存の主体としての実存者が現れるという出来事に他ならない。この出来事によって、「実存者なき実存すること」は、実存者が実存することへと転換される。するとどうなるのだろうか。「イポスターズによって、匿名的な存在はそのあるという性格を失う。存在者——存在するもの——は、存在するという動詞の主体であり、またそこから、彼の属詞となった存在という宿命を支配する。存在を引き受ける誰かが実存し、それ以降は彼の存在になる」(BE, 141)。非人称的、非人格的であった実存は、一人の実存者へと局所化さ

れ、実存者の実存となる。これは同時に「ある」の恐怖からの離脱をも意味することになる。このようにレヴィナスは、実存における実存者の出現という出来事のなかに、存在から逃れようとする運動を見出す。しかしこの実存者が目指す実存からの離脱は、実存者が実存するという限りでは、決して成就されない。というのも、疲労の分析が示したように、イポスターズにおける実存者の実存からの乖離は、実存者と実存の結び付きでもあるからである。<sup>(4)</sup> 彼は、この必ず挫折する離脱へ欲求を「自由についての思考」「希望」と言い換えながら、それが、自己へと繋がれた実存とは別の実存の様態の「予感」であると考ええる。そしてこの実存の別の様態こそ、時間であるとする (EE, 152)。しかし「他の瞬間の絶対的他性… (中略) …は、決定的に自己自身である主体のうちに見出すことができない」 (EE, 160) 主体は主体である限り、自分の力では、この実存の別の様態に移行することができない。そこで彼は、「この他性が私に到来するのは他人からではない」 (*ibid.*) という解答を出す。つまり、イポスターズを主題とすることで明らかにになった、主体の自己から逃れようとする運動は、実は他人との関係 (「社会的関係」 (EE, 160)) をめざしており、時間をめざしているというのである。<sup>(5)</sup> ここで、イポスターズの問題圏を脱する必要がある。事実、「時間とは… (中略) …主体の他人との関係そのものである」ことを示そうとする (TA, 17) 『時間と他者』 (一九四八年) においては、前半部では再度イポスターズの分析が繰り返されるが、主眼はむしろ、著作後半部で考察される、他人との関係の問題にある。このようにレヴィナスはイポスターズを問題としながら、「私」のうちに、存在から逃れようとする運動を発見した。ただし本質的に自己の存在と結びつくという出来事である「私」は、それゆえに、自らの働きだけでは存在への繋縛から解かれることがない。そこで時間と他者への関係が問題となる。

ところで絶対的他性をもつ他者への関係は、世界内における対象との関係として解されてはならないはずである。というのも、先に見たように、対象は主体としての私の内面性に対し外的ではあるが、私の志向に準拠するもの、

「われわれからやって来る」ものだからである。

またその一方で、「私」と他者との関係は、その関係において「私」の主体性が失われるものであってもならない。たとえば『実存から実存者へ』の翌年の著作『時間と他者』においてレヴィナスは、主体に対して他性を維持する他者の例として、はじめに死を取り上げる。だが、仮に主体と死との関係において死が主体の主体性を失わせてしまうとすれば、それは存在から逃れることにならない。なぜなら、主体性の消失は「ある」への回帰を意味するからである。「ある」からの離脱の運動の第一段階として、イポスターズが必要なのであった。そこでレヴィナスは、「どのようにして実存者は、死せるものとして実存し、それにもかかわらず、その『人格性』に固執し、匿名的な『ある』に対するその征服を、その主体の支配を、主体性の獲得を保存することができるのだろうか」(TA, 65)と問うことになる。主体が自身に対し絶対的な他性をもつ他者と関わりながら、その一方で主体性を維持し続けるような関係。今やこのような対他関係が問題となる。

『時間と他者』のレヴィナスは、このような対他関係が純粋な形で現れている具体的状況が、他人との関係であるとする。そしてエロスにおける女性との関係、「多産性 (fécondité)」における父子関係を分析することで、「私」が維持されたまま他者と関係し、「私」が存在から離脱する可能性を探索する。しかし本論ではそうした分析とその成果を吟味する余裕はない。続く二つの節でわれわれは、このような問題にかんして、言葉の問題がどのような意味を持つのかを検討したい。

次節で取りあげる論文「存在論は根源的か」でレヴィナスは、ハイデガー存在論をもう一度問い直し、「私」と「私」の実存の関係に還元されない対他関係として、他人への関係を主題にあげる。そしてそこで組上に載るのが、言葉である。

第 二 節

一九五一年に発表された論文「存在論は根源的か」<sup>(6)</sup>でレヴィナスは、ハイデガーの存在論にかんして、「存在一般の認識——あるいは基礎的存在論——が、認識する精神にとつての事実的な状況を前提としている」(EN, 13)ことを、その独自性として評価する。レヴィナスの理解に従えば、ハイデガーにおいて「本来的といわれる存在論は、時間的実存の事実性と一致する。存在することとしての存在を了解すること——それは、この世 (ci-bas) で実存することである」(ibid.)。しかしこのとき、現実にも実存することそのものが、存在了解によつて規定されることになる。「存在了解は観想的態度だけでなく、人間の全行動を想定することになる。人間全てが存在論である」(ibid.)ということになる。五一年のこの論文は、このような「存在論」としての実存が、人間の根源的なあり方であるのかどうかを問う。

ところで、「人間全てが存在論である」とき、「私」と諸存在者の関係は、「私」と存在することとしての存在との関係に帰着してしまう。というのも、「私」が諸存在者と関係を結ぶこと、諸存在者が現れることは、「私」が存在からそれら諸存在者を了解することに他ならないからである。レヴィナスによる解説を見てみよう。「(前略) ……ハイデガーは、存在者が存在するという、いわば形式的な事実のうちに——その存在するという働きのうちに——その独立性そのもののうちに——存在者の知解可能性を見いだした。これは、主観的思惟へのまえもつての依存性を含意するのではなく、存在者が存在するという事実そのものによつて開かれた、有資格者を待ち構える空席のようなものを含意する」(EN, 16)。すなわち、「私」がある存在者を了解するという仕方での存在者と関係を結ぶことが可能な

は、その存在者が存在することによる。このとき、「私」とある存在者との関わりは、存在者との直接的な関わりではなく、「存在」という地平に存在者を見いだすこと」(ibid.)であり、「特殊な存在を理解することとは、すでに特殊なものの方へと身を置くことである——了解することとは、常に普遍的なものについての認識である認識によって、唯一実在する特殊なものに関わることである」(ibid.)ことになる。このように「私」と存在者の関係が、「私」が存在者を存在するものとして了解すること、あるいは「存在者を存在者として了解すること——存在者を存在者として自由に存在させておくこと」(ibid.)であるとすれば、「私」と存在との関係が、「私」の実存が最も重要な問題となる。

しかしながらレヴィナスは、ここで、「存在論」に帰着しない「私」と「存在者」の関係があると考える。そしてそのような特別な「存在者」とは、他人であるという(EN, 17)。だが、存在という地平において「私」によって発見されるといふ仕方以外に、他人が「私」と関係を結ぶことが可能であるとすれば、それはどのようにしてなのだろうか。この五年の論文のレヴィナスは、それを、「私」が他人に呼びかける関係であると考える。「われわれの他人との関係において、問題となっているのは、存在させておくことだろうか。他人の独立性が成就されるのは、呼びかけられたものという彼の役割においてではないだろうか。ひとが語りかけているところの誰かは、先に、その存在において了解されているのだろうか。決してそうではない。他人は先に了解の対象で、次に対話者であるというのではない」(ibid.)。対話者が対話者であるのは、彼が存在者として「私」によって了解されているからではない。たしかにレヴィナスは、対話者を存在するものとして、存在から彼を了解することができることを認める。しかし「私」と対話者の関係は、この了解に収まることがない。「私」が関係している人格を、私は存在と呼ぶ。だが私は彼を存在と呼びながら、彼に訴えている。私は彼が存在しているということだけを単に思惟しているだけでなく、彼に語りかけてい



る。…(中略)：私は彼に語りかけた、換言すれば、彼が具現する普遍的な存在を無視し、彼がそうであるところの特殊な存在者だけに関係したのである」(EN, 18)。仮に、「私」の発話が了解の派生的な様態であるとしても、「私」の発話が対話者に向けられているという事実、「私」が対話者に語りかけているという事実は了解によつては説明できない。レヴィナスによれば、それは、「私」が対話者に語りかけることにおいて成立しているのが、「私」が対話者を存在者として了解するのとは全く異質な関係だからである。そしてこの関係こそ、他人としての他人への関係に他ならない。

ここからレヴィナスは、言葉の概念を拡張しつつ、他人との関係を結ぶことそれ自体が、他人へと語りかけること、呼びかけることであるとす。先の考察に続く箇所から引用しよう。「人間とは、私がそれに出会うことが、その出会いそのものを表現する (exprimer) ことなしには可能でないような、唯一の存在である。まさにこの点で、出会いは認識と区別される。人間に対するどんな態度にも、挨拶がある——たとえそれが挨拶をすることの拒否としてであっても」(ibid.)。ここでの「表現 (expression)」とは、他人に関する思惟を他人の精神に移しかえることでも、私があらかじめ他人と共有している了解をあとから言葉で「分節化」することでもない (EN, 19)。とすれば、「出会いそのものを表現すること」と「出会うこと」とが不可分であるとは、どういうことだろうか。他人に語りかけることにおいては、「私」が語りかけるのに先立って、語りかけられる者としての他人がそのようなものとして存在し了解されているのではない。語りかけられる者は、語りかけることにおいてそのようなものとして現れるのであり、語りかけることそのものが、語りかけられるものとの関係の起源なのである。つまり、出会ってから言葉が発せられるのではなく、語りかけること自体が出会いなのである。したがって、もし存在するものとしての存在者の了解にぞらえて、他人を特別な意味で「存在者」とよび、また他人と関係を結ぶことを特別な意味で「了解」と呼ぶとすれ

ば、次のように述べることも可能である。「私が、そのようなものとしての存在者を了解することは、既に、私が彼に対しこの了解を表現することである」(EN, 18)。

このように五一年の論文「存在論は根源的か」は、ある存在者を了解することと、ある存在者に語りかけることの間の差異に注目し、そこから対話者との関係に、了解における存在者との関係以上の意味があることを論証する。こうして抽出される、語りかけることという言葉の関係が、レヴィナスの考える、真の意味での他人との関係なのである。

ところで、この論文で「私」と存在者の存在論に帰着する関係として問題化されたのは、『実存から実存者へ』での、「私」と対象との関係に他ならない。ここでは、世界における対象は、主体に対して外的ではあるものの、その意味は「私」の志向に準拠しており、結局のところ「われわれからやって来る」ものであるとされていた。しかしこの戦後期の著作は、イポスターズを掘り下げることによって、世界における対象との関係に汲み尽くされない他者との関係が、そして結局のところは他人との関係が、どのようにして可能かという問題に行きついたのであった。「存在論は根源的か」は、こうした他人への関係として、「私」が他人へと言葉を向けるという関係を提示するのである。

次の節では、このように他人への関係として考察された言葉が、六一年の著作『全体性と無限』においてどのような役割を果たすのかを見てゆきたい。

## 第 二 節

問題となっている主体と他者の関係は、『全体性と無限』においては、「同 (le Meme)」と「他 (l'Autre)」の関係

として捉え直される。このとき、「他」は「同」に対して絶対的他者でなければならぬ。そしてこの著作では、絶対的他性を持つ限りにおいて「他」は「超越的 (transcendant)」であるとされ、またそのような「他」との関係は「超越 (transcendence)」と呼ばれる。

しかしこの関係は、両項のあいだの可逆的な相関関係ではない。というのも、こうした場合二つの項はひとつの体系を構成する要素となり、この体系を外部から見ると視線によって、これら諸項は統一されてしまうからである。そしてこの統一は、「他」の他性を破壊してしまうからである (II, 24)。そこでレヴィナスは、「他」が絶対的他者であるためには、「同」が「他」から「分離」されていなければならないとする。しかしこの「分離」は、可逆性の否定以上のことを含意している。「他」の他性、「他」の根本的な異他性が可能であるのは、「他」が、出发点に留まること、関係への入り口としての役割を務めること、相対的ではなく絶対的に『同』であることをその本質とするような項に対して、他者である場合のみである。項が関係の出发点に絶対的に留まることができるのは、自我 (Moi) としてのみである (II, 25)。つまり、関係づけられる二項が、その二項を体系のうちに位置づける視線によって統一されないためには、この関係が、両項のうち的一方から他方へ向かう関係でなければならない。そしてレヴィナスは、一方から他方へというこの関係が、この関係の全体を捉えようとする思惟者の視線から逃れ続けるには、視線の「私」がこの関係の出发点の項でなければならないとするのである。「同」と「他」の関係は、「私」として「他」から「分離」されている「同」と、これに対して絶対的な他性をもつ「他」との関係でなければならない。

そして『全体性と無限』でのレヴィナスは、この「私」の同一性は、「同」が存在するということそのものにおいて獲得されるものであるとする。続く箇所を引用しよう。「私 (moi) で在ること、それは、ひとが座標系にもとづいてなすあらゆる個別化を越えて、同一性を内容として持つことである。私とは、… (中略) …その実存すること

が、自身を同一化すること、自らに到来するあらゆるものを通して自身の同一性を再発見することに存している存在である」(BE, 25)。つまり、「私」は、何物かによってそれとして同一化される限りで「私」のではなく、存在することそれ自体によって同一化されている。しかし、この「私」としての「同」が自らを同一化するとはいえず、この同一化は「他」との単なる対立に基づくのではない。なぜならこの場合、「同」は二項を包括する体系の、すなわち「全体性」の一部となってしまうからである(BE, 27)。レヴィナスは自己を同一化しながら存在する「同」のこの本源的なあり方が、「享受」であるとす。そして「同」と世界内の諸事物との関係は、すべてこの「享受」に帰着する。「同」と諸事物の関係はすべて、「同」の自己同一化の運動に包摂されてしまうのである。この著作においてレヴィナスが「私」を「同 (Même)」と呼ぶ所以はそこにある。

「同」と「他」の「超越」の関係が可能であるためには、「同」がこのようにして「他」から「分離」されている必要がある。しかしながら、「同」がこのようなものとして規定されたとき、「同」は果たして「他」と関係を結ぶことができるのだろうか。そのような関係があるとすればどのような関係だろうか。「しかし、『同』が、エゴイズムとして生み出されながら、『他』の他性をすぐさまに剝奪することなく『他』との関係に入ることができるのは、どのようにしてなのだろうか。この関係の本性はどのようなものだろうか」(TI, 27)。

ところでこの問題は明らかに、『時間と他者』において主体と他者の関係について立てられた問題の延長線上にある。『時間と他者』で、この関係に課せられた条件として、われわれは次の二点に注目した。第一に、他者の意味は、世界における対象とは異なり、主体の運動に準拠してはならないこと。第二に、他者との関係にあつて主体はその主体性を保存し続けること。『全体性と無限』においては、この条件が練りあげられ、「分離」を維持しながら「超越」を果たす「同」と「他」の関係として捉え直されている。

では、こうした関係はどのようにして可能か。『全体性と無限』で言葉があらわれるのは、ここである。『同』と『他』の関係——われわれはそれへ実に常軌を逸した諸条件を課しているように思われる——が言語活動 (langage) であることを示すよう努めよう。事実、言語活動はある関係を成就するが、諸項はこの関係において隣接しておらず、『他』は、『同』との関係にも関わらず、『同』に対して超越的であり続ける。『同』と『他』の関係——あるいは形而上学——は、本源的に言説 (discours) として演じられる。言説において『同』は、『私』の——唯一無二で土着的な存在者の——自己性のうちに収縮しながら、自己を離脱する (TI, 28-29)。「存在論は根源的か」では、対話者としての他人は、存在論に収まらない存在者であるとされていた。この対話者は、『全体性と無限』の用語法で言い換えれば、絶対的他性をもった「超越的」な「他」としての他人である。言語的な関係においてこうした「他」との関係が成就する点では、レヴィナスは五年の論文と同じ見解にある。他の箇所から引用しよう。「他」を知り『他』に達しようとする意図は、他人との関係において達成される。この関係は、その本質が呼びかけであり呼格である言語活動という関係のなかに紛れこんでいる。他者は、呼びかけられるや否や、その異質性において維持され確認される… (後略) (TI, 65)。ここでは、「呼格」が言語活動の本質として位置づけられ、呼びかけにおいて「同」と「他」の超越の関係が認められる。

ところで「超越」の関係としてこうした言葉の関係において、絶対的他性を維持する「他」は、その意味を「同」の同一的な運動に負っていない。それでも「他」が意味をもつとすれば、それは「同」によってではなく、自分自身で意味をもつのでなければならぬ。このように他人が自分自身で意味をもつものとして『同』に対し自らを現前させることは、レヴィナスにとって、他人が「我々に対して自分を言うこと (se dire) (TI, 60)」、「自己を表現すること (s'exprimer) (TI, 61) に等しい。もっとも、「自己」を表現する」とはいえ、他人が自身について何らかの内容を語

によって伝えるのではないことは明らかである。ところで、絶対的他性を維持したまま「同」に対して現前している限りでの「他」は、表象の対象等と区別されて、「顔」と呼ばれる。そこで次のような言明も可能である。「顔は語る (parler)。顔の顕現は既にして言説である」(ibid.)。すなわち、言語の本質である「同」と「他」の関係において、「他」は自分自身で自己を意味するという意味で、「語る」のである。

『全体性と無限』のレヴィナスは、「分離」された「同」と、絶対的他性をもつ「他」との関係、言語活動に見出した。他人との言語的關係において、「同」は彼に呼びかける。このとき彼は、超越的な「他」に他ならない。またこれと同時に、この他人においては、「他」が「顔」として現前している。このとき「顔」は特別な意味で「同」に対し「語る」。「同」と「他」の関係は、言葉そのものであるとされるのである。

### おわりに

戦後期のレヴィナスは、イポスターズの分析によつて、自己の存在へと回帰しない「私」のあり方の可能性を探つた。そしてそれが可能となる次元として、時間と、他人への関係の二つが予告される。このうち後者に関しては、「私」が他人と関係を結ぶのは、特異な条件のもとである。すなわちこの関係において他人は、世界における対象とは異なり、絶対的他性をもたなければならぬ。さらに「私」も、この他者との関係において、その主体性を維持するのでなければならぬ。五一年の論文「存在論は根源的か」は、存在了解あるいは「存在論」をその根源的なあり方とするハイデガー存在論を問い直しながら、存在から存在者を了解するという「私」と存在者の関係には汲み尽くされない関係を、他人との関係に見て取り、さらにそれは言語の關係であるとした。「私」が対話者へと呼びかける

ことで成立する関係は、存在論に帰着することのない、「私」と他人との直接的な関係である。六一年の『全体性と無限』では、戦後期に示された条件を満たす対他関係が、「分離」された「同」と絶対的他者としての「他」の関係として捉え直される。そして、「他」から「分離」された「同」が、自身の主体性を保存しながら「他」と関係を結ぶという状況を、言語活動に見いだされる。

このように本論では、自己の存在に回帰しない「私」のあり方を追求するというレヴィナスの課題に関して、存在の問題と言葉の問題がどのように結びつくのかを見てきた。しかし『全体性と無限』において言語は、実はそれまでの著作に見られなかった新しい問題圏にも密接に関わる。それは、世界内の対象のもつ意味と、他人の顔の意味作用の関連の問題である。したがって、『全体性と無限』における言語の問題に関しては、本論はその一部を取り扱ったに過ぎない。

またわれわれは、『時間と他者』の最後の二節においてレヴィナスが試みた、エロスや「多産性」の分析を取り上げていない。この著作では、どのようにして主体は主体性を維持し続けながら他者と関わることができるか、という問いは、さらに「どのようにして自我は自己に対する他者になることができるか」(TA, 85)という問いへと進められる。そしてその解答が、主体としての父と、私でもありながら他者でもある子との父子関係、「多産性」であった。そしてこの概念は『全体性と無限』の後半部でさらに詳しく論じられることになる。したがって本論で扱った「同」と「他」の言語的關係は、『全体性と無限』で展開される対他関係の一部であるに過ぎず、さらにこの著作における他者問題への最終的解答でもない。<sup>(7)</sup> これらを扱うことは今後の課題としたい。

下の著作からの引用・参照箇所は、本文中にそれぞれの略記号と頁番号を記して示した。

- E. Levinas, *De l'existence à l'existant*, Vrin, 2004 (EE.)
- E. Levinas, *Le temps et l'autre*, PUF, 2007 (TA.)
- E. Levinas, *Touche et infini : Essais sur l'extériorité*, Le livre de poche, 2006 (TI.)
- E. Levinas, *Entre nous : Essais sur le penser-à-l'autre*, Le Livre de poche, 2007 (EN.)

- (1) 註  
以下、『全体性と無限』と表記する。
- (2) カントは『純粹理性批判』の神の存在の存在論的証明の不可能性を論じた箇所、次のように述べている。「存在(Sein)は、明らかに実在的述語ではない、換言すれば、物の概念に付け加わるような何か或る物の概念ではない」(『純粹理性批判』中)(篠田英雄訳、岩波文庫、二〇〇五年)、二六五頁。
- (3) 『時間と他者』でレヴィナスは、「Sein」「Scolendes」をそれぞれ「être(存在する)」「étant(存在者)」と訳すよりも、音の響きがいいという理由から、「exister(実存する)」「existant(実存者)」の仏語を当てるほうを好むと述べている(TA, 24)。したがって、少なくとも存在者と存在の区別が前提となっている文脈では、「être」と「exister」は同義とみなしてよい。なお、西谷修訳『実存から実存者へ』(筑摩書房、二〇〇五年)の訳注(二九〜三三頁)では、「Sein」の仏訳に「exister」を採用するときのレヴィナスの意図が詳しく解説されている。
- (4) こうしたことに関して、F. Caramelliは主体の「自己」から逃れようとする運動を「逃走(évasion)」、存在の他へと向かう運動を「脱出(exode)」とし、必ず挫折する「逃走」の構造を分析した上で、レヴィナスの後の著作で「脱出」が問題の中心となることの必然性を論証している。Cf. Fabio Caramelli, «De l'évasion à l'exode. Subjectivité et existence chez le jeune Levinas», *Revue philosophique de Louvain*, t. 80, Institut supérieur de philosophie, 1982, pp.553-578.
- (5) 庭田茂吉「レヴィナスにおける時間の超越と存在論的差異の彼方」(『人文學』第百八十六号所収、同志社大学人文学会、二〇一〇年)は、存在からの離脱という戦前からのレヴィナスの課題に関して、イポスタースの問題圏の限界を詳細に論じている。
- (6) 岡田篤志「レヴィナス言語倫理学の生成と構造(1)」(『関西大学哲学25』所収、関西大学哲学会、二〇〇五年)および「レ



ヴィナス言語倫理学の生成と構造(2) (「関西大学哲学26」所収、関西大学哲学会、二〇〇八年)は、『全体性と無限』に先立つレヴィナスの三つの論文、「語の超越。ミシェル・レリスの『ビフュール』について」(一九四九)「存在論は根源的か」(一九五二)「自我と全体性」(一九五四)を順にとりあげ、『全体性と無限』以前の言語論の形成過程を追っている。

(7) 『時間と他者』および『全体性と無限』における、エロスや「多産性」については、庭田茂吉「他者から無限へ——レヴィナスの時間論——」(「同志社哲学年報」山形頼洋教授追悼特別号所収、*Societas Philosophiae Doshisha* 編、二〇一一年)が、『全体性と無限』以前のレヴィナス時間論におけるこれらの意義とともに、詳しく論じている。